

## 意思決定支援システムの鍵

講談社 BLUE BACKS 318頁 1993年12月刊 定価800円

コンピュータが、いわゆるエンドユーザーにも浸透する中で、これを、人間の意思決定を支援するための道具として利用しようとする試みは、これまでも数多くなされてきた。意思決定を定型的にとらえて失敗したMIS (Management Information System) の反省のもとに提唱された、意思決定支援システム (DSS—Decision Support System) は、こうした試みの主流をなすものであろう。

本書は、意思決定支援システムにおいて重要な役割を果たす、統計、OR、数値計算、AIのソフトウェアについて、実体験にもとづいて書かれたものである。そのため、随所に見られる具体例も適切でわかりやすく説明されている。

本書は、8章から構成されている。

第1章「情報処理とは」では、ハードウェア、ソフトウェアの歴史を概観しつつ、これらの発展が、1990年代をユーザーの時代とするであろうと説明し、なかでもパワーユーザーを指向する人々を本書が対象としていることが述べられている。

第2章「人間の本質—意思決定—」では、ソフトウェアの発達、人間の本質である意思決定を支援する時代をもたらしたことが、また、意思決定を情報処理の立場で分類すると、統計、OR、AI、数値計算の4つに分類されることが書かれており、これら4つの役割について簡単に説明が加えられている。

第3章「エンドユーザー—言語がほしい」では、生産性向上のためには、エンドユーザー—言語および第4世代言語 (4GL) が重要であり、その例として、統計ではSAS、ORではLINDO、AIではEXSYS、数値計算ではSpeakeasyをとりあげて説明されている。

第4章「SASを使おう」では、汎用統計パッケージの特徴、統計で何ができるのか、応用分野で何があるのかについて解説されている。

第5章「数理計画法—ORの花形—」では、ORの手法のうち、数理計画法を特に取り上げて、会話型数理計画法パッケージのLINDOと、テンプレート・モデ

ルの考え方が紹介されている。

第6章「数値計算をする」では、ベクトル、行列、配列、集合、時系列を処理の対象とする中間言語であるSpeakeasyについて書かれている。

第7章「混乱するAI」では、80年代後半のAIブームがすっかりさめきってしまった原因を考えながら、現実的な視点で、AIシエルの役割を知るためにEXSYSを例にとり、GUI (Graphical User Interface) のもつ意味や、実際のES (Expert System) の構築例が紹介されている。

最後に、第8章「ソフトウェアと人生」では、意思決定支援を実現するためのソフトウェアと著者自身とのかわりについて述べ、著者の立場や、考え方の背景を明確にしている。

本書の主張をまとめると、「おわりに」で著者自身も指摘しているように、次の点である。

●個人が、コンピュータの恩恵を受けるのは、意思決定の分野であり、そのためには、統計、OR、数値計算、AIが重要である。

●これらの教育には、従来3GLを用いた教育が行なわれてきたが、すでにエンドユーザー—言語や4GLといった便利で、高機能なソフトウェアが存在するので、これらを使うことで、生産性が大幅に向上する。

●そのためにも、良いソフトウェアを選択する必要があり、その指針および実例を紹介している。

残念なのは、タイトルからは、いわゆるDSSそのものについて書かれていると期待されるが、本書では、これについては、あまり触れられていない。DSSに関しては、本誌「DSS・AIにおけるORの適用」35巻6号等を参考にされたい。

しかし、全体として、文章でソフトウェアを紹介するという難しい課題を、独自の実務経験をもとに見事にこなしているといえる。これ以上は、まさに「百聞は一見にしかず」で、本書に紹介されている、ソフトウェアや文献を参考に実際に体験するしかないであろう。

(笹山晋一 東京ガス(株))